
姫ヶ谷コトハの心理学方程式

invisiblehand

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫ヶ谷コトハの心理学方程式

【Nコード】

N0021W

【作者名】

invisiblehand

【あらすじ】

※絶対に読まないでください。

——序章——

※絶対に読まないでください。

——例えば、冒頭にこう書かれているとする。

でも、『読むな』と書かれたりするとかえって読みたくなる。日本民話の『鶴の恩返し』や『浦島太郎』の物語の中でも見られる効果で、「絶対に中を覗かないで下さい」と言われたのに覗いてしまったり、「決して開けてはならない」と言われたのに開けてしまう。この心理を『カリギュラ効果』っていうの。現に今、既にあなたはここまで読んでしまった——。

さて、この物語は私、姫ヶ谷コトハと学尾シゲルが、日常で繰り広げる葛藤、心理戦を描いたものです。文頭のご挨拶がお粗末であることを、ここにお詫び申し上げます。つきましては以下、学尾シゲルの視点で本書をお楽しみいただければ幸いです。

学科専攻 二年C組 姫ヶ谷コトハ

笹枝高校心理

―第1話― 姫ヶ谷彼氏適正テスト

>i29617―3810<

「またフラれたらしいよ」

「また？ これでも何人目よ？」

――四人目。始業式始まって以来これで四人目になる。これは彼女、^{ヒメガヤ}姫ヶ谷コトハがこの二週間でフツた男の数だ。いや、『別れた』とでも言うべきか。彼女は一度告白されると、それを断った事が無い。一度付き合う事で彼氏として適正かどうかを判断しているらしい。いつしかそれは、正式に付き合うまでの『姫ヶ谷彼氏適正テスト』と呼ばれるようになっていた。そして恐らく五人目の受験者となるであろう男が、今まさにオレの目の前にいた。

オレの名前は学尾^{マナビ}シゲル。^{ササエダ}笹枝高校二年生で、心理学の勉強をしている。にもかかわらず人との付き合いが苦手なのだが、どうやら困っている人を見ると放っておけない性格らしい。そのせいか、よ

く人から相談や頼まれ事をする。言うなれば、オレが心理学を専攻し、『臨床心理士』を目指している所以だ。心の中では『面倒だ』^{ユエン}と思っではいるものの放課後、今教室で本人曰く『心友』の^{イナシバ}稲芝コウイチくんの恋愛相談に乗っている自分がいた。

「おいシゲル！ 聞いてるか？ シゲルくん」

「ん？ なんだっけ」

「やっぱりまた考え事かよ。お前そういうの多いよな。頭の中で一人称小説のナレーションでもしてるつもりか？」

そんなワケないだろう。オレはよくこうやって一人、考え事をしでは自問自答を繰り返すという癖がついてしまっているだけなのだから。しかしどうだろうか。もし第三者視点からオレの心を読んだのであれば、まるでコウイチの言う小説に見えなくはないのかもしれない。

「でもお前は主人公って柄じゃないな。今度の事で主人公は俺、ヒロインに姫ヶ谷ってなるだろう」

自称心友のコウイチが勝ち誇ったかのように言った。

「はいはいそれで、オレにどうしろと？」。オレは机に肘を付いてコウイチに問い返す。

「今度、姫ヶ谷彼氏適正テストを受験しようと思う」

つまり、彼は『姫ヶ谷に告白をしようと思う』と言っているワケなのだが。

「そこで、主人公の俺としては失敗できないのである！」

「じゃあ脇役のオレは告白するお前を見守っていればいいんだな」

「違う違う、それじゃあ何のためにお前は心理学を勉強しているんだよ」

『お前のためじゃない』と言う事だけは自信を持って言えるが、心の中で彼にそうツツコミを入れている自分にも一つツツコミを入れたいというのが本音だ。

「……って言うかお前も心理学専攻だろうが」

「そう、恋愛とはつまり心の駆け引き、心理戦、タイミングが命なんだ。そこでお前に一つ頼みがある」

そらきた。相談から頼み事へのナチュラルシフト。

「……俺が告白する前に、お前試しに告白してみてくれないか？」

「はあ？」

そんな滅茶苦茶な頼みがあるか。

「^{テキ}的を知り己を知れば百戦危うからずって聞いたことあるだろ？」。

まあこの場合、『敵』が「^{テキ}的」になる方が意味が通るが。続けてコウイチは口を開いた。「シゲル、お前が先に彼女に接近することで、この恋愛必勝への方程式を築き上げる」

つまり、彼は『オレを捨て駒にして情報を集め、姫ヶ谷の彼氏になる』と言っているワケなのだが。当然、オレは断った——『面倒だ』。

「……それは無理な相談だな」

「じゃあ、せめて姫ヶ谷に関する情報だけでも調べてくれないか？」。コウイチは空かさずこう言ってくる。

オレはしばらく悩んだ結果、不本意ではあるがその頼みを受け入れてしまった。

「それくらいなら」

そらきた。オレの放っておけない性格。

「でも、何でオレなんだ？ このC組なら皆心理学専攻だろ？」

「それはほら、あれだよ……相談事ならシゲルが一番だって、皆言ってたから——」

結局、断らずにその指名を引き受ける事になり、後にオレは五人目の『姫ヶ谷彼氏適正テスト』の受験者となる。もちろん、最初は情報を得るただけに、彼女に接近するつもりだった。

そしてオレは、願っても無い形で彼女に接近することになる。

―第2話― コウイチの頼み

その日は、HRで委員決めが行われることになった。――その結果。

「では、ジャンケンで負けた学尾くんと姫ヶ谷さんをクラス委員に任命します」

皆の拍手喝采の中でオレは深くため息をついた。『面倒だ』。しかし姫ヶ谷コトハを知るには絶好のポジションではある。そこでオレなりにこの数日間で調べ上げた、姫ヶ谷コトハの考察をまとめてみることにした。

姫ヶ谷コトハ。彼女はオレと同じく笹枝高校心理学専攻の二年C組で、今年初めて同じクラスになった知的女子。ご存知の通りオレ同様、ジャンケンで負けてクラス委員になった一人だ。その艶のあるしっとりとした黒髪には一切の癖が無く肩下まで伸びている。女子生徒の中では平均的な身長を持ち主だが、高校二年生にして人並み離れたそのプロポーションは、男女問わず周りの目を引いていた。二週間で四人の男をフツたというだけであって、かなりの美貌の持ち主だが、性格の方はというと……まだ情報が足りない。やはり噂や客観的視点では得られる情報は限られてくる。ここからは直接話すしか……。

そしてやってきたこのシチュエーション。その日の放課後、オレと姫ヶ谷コトハはクラス委員の仕事をしていた。二人きり。周りには誰もいない。コウイチから引き受けた頼み以上の事になるが、なぜかオレの頭の中には最初の頼みである『告白』が過ぎっていた。今がチャンスかもしれない。ならばオレが攻略してみせよう。この『姫ヶ谷彼氏適正テスト』を。唾を呑みオレは口を開いた。

「好きです。僕とつきあってください」

「ごめんなさい」

あろう事か、ソッコーでフラれてしまった。——いや、ちょっと待て。大体彼女は断ることをしないはずじゃないのか？ 一度付き合う事で彼氏として適正かどうかを判断しているんじゃないのか？ それがこの最短記録だ。

「それより、委員の仕事早く終わらせましょ」

「ハイ……」

自分で言ってみなしくなるが、オレの返事は大層情けなかった。しかし何故だ？ 解せない。それに気まずい。しばらく間を空けて、姫ヶ谷は口を開いた。

「……その言葉、あなたがホントに私を好きになった時、もう一度聞かせて」

「はあ……え？ どういう事ですか？」

彼女はここで初めて、オレに視線を向けた。

「だって……あなたは私に恋をしていないでしょう？ 差し当たり、誰かに頼まれて私を探ろうと近づいたといった所かしら」

オレは姫ヶ谷のその言葉に呆氣に取られていた。全くのその通りである。オレの告白に気持ちが入ってなかっただけかもしれないが、計画を見破られていた。まるでそう、心を読まれているような感覚だ。オレは彼女に返す言葉も見つからない。しかし、この瞬間から心友コウイチの計画は破綻してしまった。すまない。

しかし話はここで終わらなかった。

「ねえ学尾君、そんな第三者さんのあなたに聞きたいんだけど、その人は私のどこが好きなの？」。姫ヶ谷はそう言ってシャーペンのノックを下唇に押し当てる。

「それは多分、姫ヶ谷さんが美人だから……かな？」

その答えに彼女はため息をついた。

「それは私の見た目が好きってことなの？」

「いや、きつと性格も……」オレはコウイチを弁護するべく、とっさにそう言った。

「それはウソね。でなければあなたに探りを入れさせたりしないわ」
すまないコウイチ。次に告白する時はもっとハードル上がってる
かもしれない。

「皆そうなの。前に私に告白してきた四人も、美人だとか可愛いだ
とかで私の外見ばかり。話した事もないのに、誰も私の内面を見て
くれなかったわ。少なくとも、あなたとは違って本気だったみたい
だけ」

一瞬ではあったが、そこには悲しそうに俯く姫ヶ谷コトハの姿が
あった。贅沢な悩みだ。しかし人が第一印象を見た目から入るのは、
仕方が無い事じゃないのか？ オレはそう心の中で、彼女に問いか
けていた。

「にしても学尾君ってお人よしね。普通ならそんな頼みは引き受け
ないと思うけど、何て頼まれたの？」

もうここまで来ると、オレは何一つ隠す気がなくなっていた。

「ああ、最初は『試しに、姫ヶ谷に告白してみてくれないか？』っ
て言われて、さすがに断ったんだけど『じゃあせめて、情報だけで
も』って言われて……思わず引き受けちゃった」。オレは頭を掻き
ながら言う。

「ふーん……」

コトハは意外にも、興味津々な表情でオレの顔を覗きこんでいた。
その大きな瞳を直視できずに、オレは思わず視線を反らす。

「そ、それで姫ヶ谷に近づいたはいいがなんていうか、頼まれた事
以上の仕事をしてやろうと張り切っちゃったっていうか」

「その結果が今の『告白』ってワケね？」

「まあ、そうなるな」

彼女はしばらく間を空けると視線を下ろし、やがてクラス委員の
仕事に戻った。オレはそんな姫ヶ谷を目で送り、仕事を再開しよう
としたその時、彼女は再び口を開いた。

「――もし、その依頼人が同じ本校の心理学科の人間なら考えられ
る事は一つ。あなた、マインドコントロールされてるわよ？」

「マインドコントロール？」

―第3話― マインドコントロール

オレは姫ヶ谷に問い返した。その問いに答えるように、彼女は語りだす。

「マインドコントロール。それは特定のターゲットに対し言葉や行動を用いて、ある目的へと相手を誘導するのが狙い。ターゲットは無意識のうちに相手の思惑通りに動いてしまうの」

オレは腕を組んで考え込んだ。彼女に言われる事をイメージとして回想する。

「いい？ 学尾君。その依頼者はまず『私に告白してみて』と言ったんでしょ？」

「ああ、言った」

「でも当然あなたは、そんな滅茶苦茶な頼みが聞けるわけもなく断った」

「その通り」

「でもその後に、『せめて私に対する情報だけでも調べてほしい』と言った」

「まあ、だいたいそんな所かな」

「これは心理学における深層心理を利用した交渉術で『ドア・インザ・フェイステクニック』って言われているの。最初に相手が断るであろう負担の大きな要求をし、断られた所を空かさず本題である比較的簡単な要求をする。頼まれた方には、『一度目の要求を断ってしまった』という罪悪感が残っており、二度目の要求を簡単に呑んでしまうの」

「あっ……」

オレは思わず声をあげてしまった。コウイチに頼まれていた時の心理は、まさに姫ヶ谷が言った事そのものだった。

「あいつがそんな事を!？」

「それだけじゃないわ。結果あなたは断ったはずの『告白』をして

きた。依頼人との会話の中で、煽てられたりはしなかった？」

オレは頭の中で依頼人コウイチとの会話を思い出していた。しばらく考えるていると、とっさにあの一言を思い出した。

「そういえば、何でオレに頼むか尋ねた所、『相談事ならオレが一番だ』って」

「本人がそう言ってたの？」

「いや、他の皆が言ってたらしい」

「なるほどね……。それは第三者を通じて間接的に相手を褒める事で、褒めた相手が意欲的になる『ウィンザー効果』。結果あなたは断ったはずの『告白』をしてしまった。……そしてその矛先は私にも向けられている」

「どういう事だ？」

「ウィンザー効果の重複技とでも言うのかしら。あなたを説得するために使われ、今度はあなたを通じて依頼人の好意が私に伝わる事で、私が依頼人に対しても好印象を持つという事を含めた高等技術ね」

オレは心友のコウイチや、今日の前にいる姫ヶ谷コトハの心理、その読みの深さに圧倒され続けた。オレは本当にここの心理学科に来て良かったのだろうか。そう考え込むオレに、気づけばコトハが声をかけ続けていた。

「学尾君、ねえ聞いている？　こっちは集計終わったけど、そっちはどう？」

「ああ、こっちもあとちょいで終わる」

——話は変わるが、我が笹枝高校では学期ごとにクラスマッチが行われている。明日の委員会では、各クラスで持ち寄った競技種目の中から一つに絞ることになっている。今日はそのためのクラス集計をしていた所だ。

「つてなわけでウチからは票数の多い水泳大会って事で」

この結果には感無量だ。コウイチの作戦通り、さすが我がクラスの男共は分かっている。

「……なんだか腑に落ちないけど、集計結果なら仕方ないわね。明日二年C組は水泳大会で提出するわ」

オレはクラス委員の仕事を終え、一息ついた。姫ヶ谷コトハは帰るための身支度を整えている。

「なあ姫ヶ谷……今度告白してくるヤツがいたら、そいつにチャンスを与えてやってくれないか？」

彼女はしばらくオレの方を見ると、やがて口を開いた。

「なるほど。その人があなたに私の調査を依頼した人ってことね」

「あっ、いや……頼む」

「さあ、どうかしら。そんなことよりあなたって案外、友達思いなのね」

姫ヶ谷コトハはそう言捨てて、教室を後にする。

「……オレも自分で自分が信じられないよ」

―第4話― クラスマッチ競技投票

翌朝、学校に着くやいなやオレは自称心友のコウイチに捕まった。「で、今度のクラスマッチの競技投票、ウチのクラスは何になったんだ？」

オレは右手親指を突き立て言う。

「水泳大会だ」

「っしやー！ー！！」

――と声を上げて喜ぶお前にも今回ばかりは同感だ。

「特にウチのクラスの女子はレベルが高い方だから」。とは言うものの、まだ全体会議が残っている。

「知ってると思うが、まだ決定じゃないからな。今日の放課後、クラス委員会が開かれて競技が一つに絞られるから、全体で六クラスある事を考えると……」

「その事なら大丈夫だ。……実はB組とD組にも心友がいてね。そっちにも水泳大会になるように手は打ってある」

なるほど。六組中、三クラスが水泳大会に票を入れれば、ほぼ確実に決まる。コウイチはそういう所だけは徹底しているからな。

しかし、いつも作戦に穴があるのがコウイチだった事を、この時のオレは忘れていた。

その日の放課後、委員会に出る準備をしているとコウイチが血相を変えてオレの席に走ってきた。

「シゲル！ おい、シゲル！ あいつらしくじりやがった」

「ん？ なにが」

「水泳大会だよ。投票日、B組のヤツは風邪で欠席、D組のヤツは忘れてただって」

「なんだってえ！？」

「なあ、その場合……選考ってどうやって決まるんだよ」

「他の競技が二票以上あれば、それに決定。一つも被らなかった場合……」

「被らなかった場合？」

「六クラス代表、ジャンケンバトル」

「つぁー……」

——と目の前で頭を抱えながら奇声を上げるお前にも、また同感だ。っていうかなんでそんな頼りない『心友』ばかりいるんだお前は。いや、それを肯定してしまえばオレも同類になってしまいうじゃないか。こうなっては勝つしかあるまい。六クラス代表ジャンケンバトルに。

「賭けるしかないな、オレの勝負運に」

「ああ、運に賭けるのはまだいい。だけどお前、どうやってクラス委員に決まったのか、まさか忘れたわけじゃないよな」

そうだった。オレはそのジャンケンに負けて今ここで委員会の準備をしているんだ。それは相方の姫ヶ谷コトハも同じ事。だったら初めからジャンケンで負けた人をクラス委員になんて決めるなよ。オレとコウイチがそんな話をしていると――。

「今の話聞いていると、まるでジャンケンは運任せみたいに聞こえるけど？」

そう言って話に割って入って来たのは姫ヶ谷コトハだった。

「え？ そうじゃないのか？」

オレは彼女に問い返す。その横でコウイチがなにやらモゾモゾしていた。

「コホン、初めまして。俺、シゲルの心友の稲芝コウイチです」。そう言ってそっと右手を差し出した。

「ああ。あなたが例の」。コトハは腕を組んだまま答える。

「え、例の？」

オレはその会話を妨害すべく話を戻した。

「そ、そんな事より姫ヶ谷。今の言い方だと、ジャンケンは運じゃないみたい聞こえたけど」

「当然でしょ？ ジャンケンは立派な心理戦。あなた、心理学専攻してるわりには何も知らないのね。まあ水泳大会なんて、気分が乗らないから負けていいんだけど」

「……でもオレが言うのもなんだけど、姫ヶ谷もそのジャンケンで負けて、クラス委員になったんだろ？ なんとというか、説得力に欠けるような……」

「あの時はただ面倒だっただけ。勝とうと思えばいつでも勝てたわ」
コトハは自信に満ちた顔で、そう言って見せた。

「どうだか。後でなら何とでも言えるからな。もしそれが本当なら、今日の六クラス代表ジャンケンバトルに勝ってみせろよ」

すると彼女は少し考えると、ニヤと口角を歪ませて言った。

「いいわ……見せてあげる。『ジャンケンにおける心理戦』を

―第5話― 『ジャンケンの女王』 鷹崎マリ

そしてオレと姫ヶ谷コトハは二年C組代表として、委員会が開かれる会議室へと移動した。会場には各クラスから男女二名が参加する。六クラスから二名の学生と、会議を取りまとめる保健・体育の先生二名。計十四名の人間が召集された。

「ではA組から順に競技を発表してください」

やがてA組から順にクラス集計で決まった競技を発表される。他のクラスの競技が被らない事を、オレはただ祈り続けた。そして、各クラスの集計結果は――。

A組『野球』

B組『バレーボール』

C組『水泳大会』

D組『サッカー』

E組『創作ダンス』

F組『バスケットボール』

「以上が今回の候補だ！」

オレの祈りは届いた。あとは六クラス代表ジャンケンバトルを制する事が出来れば、我ら二年C組（男子）の念願である水泳大会に手が届く。しかし、オレはジャンケンで負けてクラス委員になった弱者だ。必然、『ジャンケンは心理戦だ』と言い放ち、勝とうと思えばいつでも勝てる自信満々のウチのお姫様に任せることになったのだが、忘れていた。A組には『ジャンケンの女王』と呼ばれる鷹崎マリがいた事を。^{タカ}^{サキ}

二年A組、クラス委員の鷹崎マリは一年の一学期は委員会に出なかったものの、二学期三学期ともクラス代表ジャンケンバトルに参加し、見事に連勝。その他、未だジャンケンで負けた所を見た者がいないという逸話の持ち主だ。ということは今学期は野球か、あまり得意ではないな。オレはC組の勝利を諦めていた。そんなオレの

様子を見兼ねてか、姫ヶ谷コトハはオレに尋ねてきた。

「学尾君……この六クラス代表ジャンケン、私に勝ってほしい？」

「それはもちろん、勝ってほしいけど……相手が悪すぎる」

「それはA組の鷹崎さんの事？」

「ああ、お前も知ってるだろ？ 確かに彼女を見ていると、ジャンケンは運だけではないような気がするよ」

「確かに、鷹崎さんはジャンケンに関して類まれなる才能を持っているわ。でも彼女のそれは心理戦ではない」

オレは彼女の説明を頭の中で整理していた。オレが思っていたジャンケンは運勝負。姫ヶ谷コトハの言うジャンケンは心理戦で、ならば『ジャンケンの女王』、鷹崎マリのジャンケンはいったい何だというのか。

「彼女のそれは……そうね、『不敗ジャンケン』とでも言うのかしら」

「不敗ジャンケン？」

「知ってる？ 学尾君。ジャンケンっていうのは確実に読める手が一手でもあれば『負けない』の」

「確実に読める手？」

「ええ、でも基本その一手を読むのが難しい。グー・チョキ・パーのうち、普通なら勝ち・負け・引き分けの確率はそれぞれ1/3なんだけど、そのうち相手の出す手が一つでも読めるとしたらその確率は変わってくる」

「でも、どうやって読むんだよ？」

「本来なら相手の出し手なんてそう簡単に読めるもんじゃないわ。ただ一つの例外を除いては……。それはグーよ。ジャンケンにおいてグーだけが最初はニュートラルであるがゆえに、そのシルエットに大きな変化はない。でもチョキかパーを出したならその形は大きく変化してくる。そこを見極めるの。グーかそうでないか。そうすると必然的に、相手の手に変化がなければパーを、そうでなければチョキをだせば負けはないわ」

「パーかチョキな……それにしたって難しいんじゃないか？」

「ええ、実際私には出来ないわ。でもこれも鍛え方次第では……」
そう言うとな彼女は顔の前で小さく右手こぶしを作った。

「『後出しジャンケン』」

「え？」

「いくらジャンケンの弱い学尾君でも、これなら勝てるでしょ？」

「それはまあ」

「検証してみましょう」

オレは姫ヶ谷に言われた通り、ワンテンポ遅れて手を出した。

「ジャンケンポン、ポン」

当然、オレは姫ヶ谷に勝つ。むしろ『後出しジャンケン』で負けると言われた方が難しいだろうが。

「学尾くん、今『後出しジャンケンで負けろと言われた方が難しい』って思ったでしょう？」

オレは姫ヶ谷のこの言葉に鳥肌が立った。

「おま……！ やっぱり人の心が読めるのか？」

「そんなワケないでしょ！ ……コホン。これはいたって『普通』の事なの。この十数年間生きてきた私達にとっては、ジャンケンで『勝ちたい』と思うのが普通。その潜在意識が『後出し』でも働いているが故に、負ける事の方が難しい。それを人に気づかれないように極限まで極めたのが『ジャンケンの女王』鷹崎マリ。恐らく彼女は反射神経に近いレベルでグーに対してのみ、パーを出している」
「なるほどな……そしてそれが鷹崎マリ、ジャンケン必勝の秘密」

「――御名答」

「でも、それじゃオレたちが勝つことなんて無理じゃないか。しかも今回の場合、六人同時にジャンケンするわけだから、その他の四人はどう攻略するつもりだ？ まさか五人相手に心理戦で勝つというのか？」

オレはそんな事出来るはずがないという意味合いを込めて、姫ヶ谷に言った。

「ここからは実戦を交えて見せてあげるわ。私の心理学方程式を」
そう言うと、姫ヶ谷はその『六クラス代表ジャンケンバトル』の
ステージへと足を運んだ――。

「いい？ 学尾君。これにおいては『ジャンケンの女王』、鷹崎マリが使えるの。彼女のルールは団体でも個人でも変わらない。彼女は、視界にグーを捕らえたらパーを出せばいい。仮に他の誰かがチヨキを出してもあいこになるからね。逆に視界にグーが映らない場合、彼女は必ずチヨキを出すわ。この時、鷹崎マリ意外の五人は『負け』か、『あいこ』になる。つまりこの団体ジャンケン、必勝の鍵は負けの無い――チヨキ。私は鷹崎マリのおかげで、負けることはないの」

姫ヶ谷はそう言うと、集計用紙のカットに使った手元にあるハサミを掲げた。

「なるほど……それであの団体戦は切り抜けられたんだな」。後日談である。そう、そしてここからが本番だった。一対一。事実上、『心理学方程式』 姫ヶ谷コトハ対 『ジャンケンの女王』 鷹崎マリ。心理戦対不敗戦である。

「そして私の作戦は彼女の虚^{キヨ}を突くことにあった。それ以外に勝つ方法がないからね」

コトハの言う通り、このルールを守る鷹崎マリに負ける理由は無い。

オレはその時の勝負を思い出す。

六人でのジャンケン勝ち抜いた姫ヶ谷コトハと鷹崎マリはステージに残って睨み合っていた。

「――お手柔らかによろしく。二年C組、姫ヶ谷コトハさん」

「よろしく。『ジャンケンの女王』 鷹崎マリさん」

「あら、私の事知ってるのね？ 光栄だわ。そうそう、私もあなたの事知ってるわよ。何でも、ジャンケンに負けてクラス委員になったとか」

鷹崎のその言葉に、周りの観衆がクスクス笑っていた。

対する姫ヶ谷コトハは鷹崎マリに言う。

「そうね、鷹崎さん。でもそんな私に負けたら、あなたも大恥ね」
「残念ながら負ける自信がないわ」 鷹崎は表情はその言葉通り、自信に満ち溢れていた。そんな鷹崎マリに対して、姫ヶ谷コトハはこう言った。

「ちなみに私はね、『グー』は出さないわ」

その瞬間、姫ヶ谷の言葉が、鷹崎マリの頭の中を駆け巡った。

『グーは出さない？ まさかこの女、私にグーが読めることに気が付いているの？』

鷹崎の中で思い返される六人でのジャンケン。『———そういえば先の戦いで、姫ヶ谷コトハが見せたあの手。勝った時も、あいこになった時も、チョキしか出していなかった。……つまりこれは、私の必勝法に気が付いてやっていた事？ 彼女が生き残ったのは偶然ではなく必然！？ となると、彼女が次に出す手は……負けの無いチョキ。よって私は、グーを出せば勝てる……』。鷹崎はそう考えた。

対するはコトハの心理。

『鷹崎マリ、あなたは今の一言で葛藤するだろう。先の戦いからすでに伏線は張っておいた。つまり今頃あなたは、あなたの必勝法を気が付かれたと考える。となると私が次に出す手は負けの無いチョキと考え、彼女はグーを出してくる。よって私の出すべき手はパー……』

しかし葛藤の最中、鷹崎マリが視線を戻した時、姫ヶ谷コトハの鋭い視線に気づいた。姫ヶ谷コトハは持っていたシャープペンシルの端を軽く銜え、じっと鷹崎マリを観察していた。

『———いや！ 違う。この女、私にグーを出させるために、わざとあんなことを！？ つまり、彼女の次の手はグーに勝てるパー。よって私の出すべき手はチョキ。チョキを出せば勝てる』

この時、鷹崎マリは笑いを堪えていた。

『ふふっ……読んでやった。読んでやったわよ、姫ヶ谷コトハ。あなたの策を』

二人はこぶしを前に突き出すと、『ジャンケンポン』の合図で手を出し合った。それはほんの刹那の出来事。

しかし、まさにこの瞬間。鷹崎マリは姫ヶ谷コトハの仕掛けた『心理の罠』にかかっていた。

勝負の結果、鷹崎マリのチョキに対し、姫ヶ谷コトハはグーを出し勝っていた。オレ達、二年C組の勝利である。

「……な、なんで」

鷹崎マリは目の前の出来事を受け入れられなかった。そんな彼女に、姫ヶ谷コトハは語りかける。

「あなたの敗因は、チョキを出すと硬く心に決めてしまった事。あなたのグーに対するパーも、反射神経に近いレベルとはいえ、硬い意志の上では成立しない。でももし、あなたが不敗ジャンケンのルールを破らなければ、私に勝ち目はなかったわ」

姫ヶ谷のその言葉に鷹崎はうつむいていた。

「そうか……いつも通り戦っていれば負けなかったんだ。でもあなたの『あの一言』に惑わされ、考えてしまった。それが敗因ね。完全に私の負けだわ」

「ジャンケンの才能はあなたにある。でも、心理戦じゃ負けないわ」
そう言うと姫ヶ谷はステージを下りた――。

―第7話― 望ましき傍観者達

姫ヶ谷コトハが見せたジャンケンにおける心理戦。オレはそれを、しかとこの目で見届けさせてもらった。念願叶って今年のクラスマッチは、C組（男子）が望む水泳大会に決定する。しかし意外だったのは姫ヶ谷コトハが乗り気だった事だ。最初のクラス集計では水泳大会なんて、とてもやりたそうに見えなかったが、六クラス代表ジャンケンでは積極的に協力してくれた。その数日後、オレは掃除の時間にその事をさりげなく姫ヶ谷に尋ねた事があった。

「そういえば何である時、水泳大会乗り気になったんだよ？」

「ん？ なにが」

「だから、クラスでの統計結果ではあからさまに嫌な顔してたけど、結果協力してくれたじゃん。あの時、意図的に勝つ事が出来たなら、負ける事だって出来たんじゃないか？」

オレは彼女にそう尋ねた。

「そうね……私もあの時は何でかわかんないけど、協力しちゃった。今思えば、あなたに上手くしてやられたって気もするけど」

「オレ何かしたか？」

「いや……何も。そんな事より次はあなた達にがんばってもらわないとね。今度の水泳大会、ウチのクラス二十七人から男女それぞれ代表を四名、計八名を立ててメドレーリレーだからね」

「オレ達って、女子は頑張らないのか？」

「女子是水泳のレベル高いから大丈夫なんですよ？」

オレは姫ヶ谷のその言葉を聞いて一時沈黙。なぜオレに対して疑問文？ 空かさず問い返した。

「そうなのか？」

「え？ あなた達いつか『ウチのクラスの女子はレベルが高い方だから』って言ってなかったっけ？」

それは確か、オレとコウイチのあの時の会話の一文だ。まさか姫

ケ谷が聞いていたとは思わなかった。しかもそれはあらぬ方向性で誤解を招いている。オレ達（男子）の言う女子のレベルの高さは決して『水泳』における『競技』の事ではない。あえてここでは口にしないが、その平均を上げているのは今日の前にいるあんたでもあるワケなのだが。

さらに数日後、HRで競技種目に出る人を決める事になった。その中で誰か候補者を決めるのだが――。

「誰か立候補、または推薦はありませんか？」

――三度目。HR始まって以来これで三度目になる。これはクラス委員、姫ヶ谷コトハがC組の皆に尋ねた回数だ。つまり誰一人として挙手しないのだ。姫ヶ谷は小声でオレに話しかけてきた。

「ちよつとどういう事よ！　ウチのクラスの希望で水泳大会になったんはずでしょ？　なににんで誰も立候補しないのよ？」

当然だ。この水泳大会、オレ達にとって勝敗はどうでもいいのだ。ただ傍観者である事が一番望ましいと言える。この様子じゃ、女子の中にも水泳が得意という人物はいないようだ。この場合、極力目立たないようにするのが賢い選択だ。一年次から引き続くウチの担任の性格からして、目立つと勝手に推薦されてしまう事を皆分かっている。つまりこの現状、クラス全体を見渡す限り皆同等に目立ってはいない。ただ、前に出て司会進行を勤めるオレと姫ヶ谷を除いては。

「じゃあ、仕方ないから先生が決めるぞー。まずはクラス委員の学尾と姫ヶ谷の二人と……」

案の定推薦されてしまった。隣で姫ヶ谷がビクツと反応しているのが分かる。しかし先生のこの言葉で状況が一変した。コウイチを筆頭に男子の立候補が増えたのだ。その数たるもの、代表者数の枠を超えている。っていうかカナヅチまでいる。オレはそれに肖って担任に提案しようとした。

「先生、男子の立候補者も枠を超えたようですし、僕は辞退します……」

時を同じくしてオレの左足に激痛が走る。なんだろうかこの痛みは。そしてすぐにその状況を把握する。姫ヶ谷がオレの左足のつま先を上履きのかかとでグリグリ踏みねじっていた。まるで一人だけ逃げ出すのを『卑怯だ』と言わんばかりにグリグリと。

「……やっぱりオレも出ます」

オレに選択の余地はなかった。

―第8話― 選ばれし代表メンバー

間もなく代表メンバーが決められる。男子はオレ（確定）と、立候補者によるジャンケンで勝った者三名。対する女子は姫ヶ谷（確定）と、ジャンケンで負けた者から三名の男女合計八名が選出された。なんだろうかこの男子と女子の価値観の違いは。しかしこのメンバー、ただ純粋に水泳大会における『勝ち』を狙っているヤツがいるかどうかも怪しい。水泳大会までの残り二週間、腕試しを兼ねて放課後、特訓をする事になった。

「水泳なんて久しぶりだな」

メンバーの一人、コウイチがプールサイドで準備体操をしながら言う。

「……お前、ジャンケン勝ったのな」

オレは鼻から溜息を吐くように言った。そしてまさかのこのメンバー。オレの知る限りろくに泳げるヤツなんて誰一人としていない気がする。っていうか何でいるカナヅチ。

――しばらくして女性陣の方々が姿を見せる。彼女達は水着の上にTシャツ（警戒？）姿で、しかしそれでいて期待を裏切らないプロポーションだ。さすがにC組の女子はレベルが高いとは言われるが、その中に最も期待していた姫ヶ谷の姿が見当たらない。

「あれ？ 姫ヶ谷さんは？」

コウイチがそう尋ねると、少し遅れて姫ヶ谷コトハが現れた。彼女は水着の上から薄手のパーカーを着ており、これまた見事なボディラインを絵描いていた。その姿を前にコウイチが数秒間見惚れ、フリーズしていたのが分かる。やがて彼女が持つ右手に皆の視線が集まった。

「姫ヶ谷さん、それは……拡声器？」

とっさに口をついて出る。

「うん。さっき先生に借りてきたの。やるからには厳しくいかなないとね」

「え？　——姫ヶ谷さんは監督さんでいらっしやいましたか」

オレがそう言うのと、姫ヶ谷は拡声器を口に当てた。

「じゃあまず、一人ずつタイムを計らせてもらおうわ。じゃあ学尾君から」。

そしてオレ達は、姫ヶ谷に言われるがまま一人ずつタイムアタックをしたのだが、以外にもオレを含め平均的なタイムであることに安堵した。ただし、一人カナヅチを除いては——。

「じゃあ、まず水面に顔を付けてみようかカナヅジ」

「カナヅチじゃない！　^{カナヅジ}金辻だ！」

「いや、カナヅジって言ったろ？　お前被害妄想者かよっ！」。ちなみに彼の本名は^{カナヅジキョウスケ}金辻京介である。

——と、こんな具合に金辻の水泳特訓が始まった。

当初はオレも諦め気味だったが、特訓を始めて数日後、金辻は水面に顔を付け手を引いてもらいながらであれば、前に進む事が出来るようになっていた。金辻がやる気になったのは、コウイチの『あの一言』がきっかけであろう。確かあれば、特訓が始まって数十分後の事だった。

「どうせ俺なんか無理だよ。一生カナヅチでいい」

悲観的になる金辻に対してオレは人並みながらに、しかし一生懸命に水泳のレクチャーをしていた。そんなオレと金辻のもとへとコウイチが近寄ってくる。金辻の肩に腕をかけるとこう言った。

「なあカナヅチ、姫ヶ谷がお前の事、じっと見てるぞ」

「カナヅジじゃな……え？」

オレと金辻は思わず姫ヶ谷の姿を探した。驚く事に、姫ヶ谷コト

ハはの視線はじつとこちらを見つめている。いつか見た事があるようなあの視線。そう、『ジャンケンの女王』鷹崎との勝負で見せた時の観察眼だ。姫ヶ谷コトハのあの視線は、何かを真剣に考えている時だ（以後、勝手ながら『姫ヶ谷コトハの観察眼』と名付けることにした）。その熱い眼差しを前に、金辻はやる気を出した。

―第9話― 放課後の雨やみ

水泳大会まであと五日。昼休みになると、オレとコウイチは屋上に出てコンビニのパンを食べながら話をしていた。

「あのカナヅチだった金辻が、もう一人でも十メートルも泳げるようになったな。多分コウイチのあの一言がきっかけだぜ?」

「お? 気がついたか。人は誰しも、誰かから認められたいと思うものさ。それが惚れた女ならなおの事。つまり心理学における『承認欲求』だよ」

コウイチはそう言ってパック入りのコーヒー牛乳に刺したストロ―の先をこちらに向けると、また口へと持っていく。

姫ヶ谷の事だ。おそらく意図的にあの視線を金辻に送って、やる気を出させているに違いない。ってことは姫ヶ谷コトハは金辻の気持ちに気づいてやっている事なのか? そうだとしたら何と言うか、あまりいい性格とは思えなくなってきた。男心を踏みにじっている。しかしながら、オレがそうやって他人の事ばかり考えてしまうのも、『父親譲りの正義感』といった所だろうか。そうしているうちに、ポツリポツリと雨が降ってきた。昼休みも頃合、オレとコウイチは教室へと戻る。

間もなくして教室の窓からの風景は大きく変化する。外は予報外れの豪雨と共に雷が鳴り響いていた。その位置からでも見えるプールの水面には物凄い勢いで無数とも思える波紋を作っている。

『これじゃ今日の放課後は練習できないな』

姫ヶ谷もまた、外を眺めていた。その表情は、あの時の『観察眼』のそれとは違い、何も考えていないようなボーッとした虚ろなものだ。

やがてオレはもう一つの問題点に気が付いた。案の定放課後まで降り続いた豪雨で、今日の水泳特訓は中止したのだが、――傘を持ってきていない。

「しまった」

一度玄関には来て見たものの、その雨脚は留まる所を知らず、それどころかより強くなってきたようにも思える。進む事を許されないオレの足は、再び教室へと運ばれた。そしてそんな間抜けな人間はオレ以外にいなかったようだ。普段ならまだ夕暮れ時だが、この日だけは空を覆う黒雲がその光を遮っており、辺りは暗い。オレは手探りで教室の灯りを点けた。誰もいない教室にただ一人、『置き傘が一本でもあれば』というオレの淡い期待は見事に裏切られ、特別何をする目的もなく席に着いた。

「さて、どうしたもんかな……」

当ても無く鞆の中から偶然手に取ったノートには、オレが纏めた『姫ヶ谷コトハの考察』が記されている。そのノートをパラパラと捲ると、空白だった『性格』の欄に目を留めた。そこに軽い気持ちでこう書き記す。

『性格…あまり良くない』

それを確認したオレは、自ら軽く鼻で笑う。そうしているうちにあるモノが視界の隅に入ってきた。教室に入った時には気づかなかったが、誰のものだろうか、鞆がまだ机の横に掛かっている。

『あの席は確か……』

姫ヶ谷の席だ。まだ学校に残っているのだろうか、本人の姿は確認できない。

オレはふと外を眺めた。透明な窓の向こうに降りしきる雨は、まだ止みそうに無い。その窓ガラスにポツポツと弾かれる雨粒が、外の世界をぼかしていく。

しばらく眺めていると、プールサイドの一角に動く影を確認した。最初は『気のせいかな』とも思ったが、再び現れたシルエットと、教室に残された鞆という条件の下、軽く結露しモザイクがかった窓越しにさえ、それが誰かを察する事ができた。

『姫ヶ谷……』

彼女は一人、学校指定の水着姿。これから泳ごうとでも言うのだろうか、この雨の中で準備運動をしていた。

「何してるんだ？　こんな雨の中で」

オレは無意識に、その曇りがかったガラスを手のひらで拭った。それでもよく見えない姫ヶ谷の姿を、より鮮明に確かめようと、窓を開ける。少しばかり降りかかる雨は気にならない。やがて雨音かき消すように、水を撥ねる音が聞こえた。姫ヶ谷がプールに飛び込む音だ（ただし足から）。その情景にはどういう訳か、新鮮味があった。それもそのはず、オレは今までに彼女が泳いでいる所を見た事が無かったからだ。コトハが泳ぎだすのを確かめるべくしばらく見学していたのだが、プールに入るった彼女はそこからまた一向に動こうとしなかった。

『……どうかしたのだろうか』

―第10話― 放課後のプール

やがてゆつくりと動き出すものの、その不自然さからさすがに察する事ができた。彼女、姫ヶ谷コトハは――泳げなかった。

見たところ水面に顔を付ける事は出来るようだが、いくらバタ足をしても前に進むことなく沈んでゆくその姿は、ある意味夕日よりも鮮やかだった。なんてことを考えていた。

「って、泳げなかったのかよ」

考えてみれば水泳の特訓初日も、姫ヶ谷だけタイムを計っていなかった。その裏にはこんな理由があったとは。今思えばカナツジを見ていたあの観察眼も、どうすれば泳げるようになるのかを自分なりに研究していたのかもしれない。そう考えているうちに、沈んだ姫ヶ谷が浮いてこない事に気づく。『潜水でもしているのだろうか』、という考えが一瞬浮かびはしたものの、状況が事の深刻さを説明していた。

「おい、姫ヶ谷！」

彼女は本気で溺れていた。――気がつけばオレは既に教室を抜け、プールサイドまでダッシュしている。

「姫ヶ谷！ おい、姫ヶ谷コトハ！ くそっ！」

制服を着たままプールに飛び込む。もはや考えるよりも先に体が動いていた。やや水嵩がましたプールの水は、いつもより重たく感じる。ぼやけた視界で姫ヶ谷を捕らえると、その手を取り強く引き寄せた。自分よりも先に水面上に彼女を押し出す。

「ゲホゲホッ！ はあはあ……」

「おい姫ヶ谷っ！ 深呼吸だ、深呼吸しろ」

プールの浮力を受けている事を視野に入れても、小柄で華奢な姫ヶ谷の体は思っていたよりも軽かった。そのままプールサイドまで引き上げる。溺れてからすぐに引き上げた事が幸いし、意識はあるようだ。

「おい、大丈夫か？」

「……………」

姫ヶ谷は蹲ると、しばらくその呼吸を整えていた。

「お前なあ、泳げないなら最初からそう言えよ。心配しただろ」

「……………」

姫ヶ谷は沈黙を続ける。オレは蹲る彼女に目線の高さに合わせると、両肩に手を置きその顔を覗きこんだ。黒髪からつうと滴れ落ちる雫は、雨水かプールの水だろう。その隙間から窺える表情より、頬をなぞるように零れ落ちたそれは、きっとそのどちらでもなかったように思う。オレはただそこに立ち尽くした。

「……今日はもう帰ろう」

そう言って、ベンチの上に置いてあったタオルを姫ヶ谷の肩にかけ、女子更衣室の前まで送った。オレはびしょびしょになった制服を絞り、ズボンの裾を捲くり上げ、教室まで移動するとジャージに着替える。幸い今日の放課後、水泳特訓で使う予定だったタオルを持ってきていた。

やがて制服に着替えた姫ヶ谷が、口元をタオルで押さえたまま教室へと戻って来た。

「……………ゴメンなさい」

それが彼女の第一声だった。

「大丈夫か」と尋ねるオレに、姫ヶ谷コトハは黙って頷いた。いつも勝気な彼女がこんなに弱々しい一面を見たのは初めてで、オレは少し戸惑っていた。

「今日はもう帰って休んだ方がいい。一人で帰れそうかい？」

「うん、ありがとう」

姫ヶ谷はそう言って教室を後にする。

「よし、オレも帰るかな」

彼女の後を追うような形で、玄関まで下りてきたオレは一つの問題点を思い出した。

『しまった』——傘を持ってきてないんだった。玄関で立ち往生す

るオレを横目に、姫ヶ谷コトハは折りたたみ傘を広げると、こうつぶやいた。

「……入っていく？」

―第11話― 学尾家

『約束をした』

オレは何とか家にたどり着く。玄関の明かりを点け、親父の靴が無い所を見ると、まだ帰っていないようだ。オレの右手には、持ち手の部分に猫の肉球のデザインが施された女物の折り畳み傘。この日は結局、姫ヶ谷を家まで送り、傘をそのまま借りてきてしまった。世間が言う所の『相合傘で』だが、コウイチに見られていたら殺されていた所だ。

『でも約束をした』

姫ヶ谷が泳げないという事を唯一知ってしまったオレは、放課後の後さらに姫ヶ谷に泳ぎ方を教える事を約束をしてしまった。オレはそのまま二階の自分の部屋へと足を運ぶ。明日返すのを忘れないように、折りたたみ傘を鞆に忍ばせた（親父には見られたくない）。その時、鞆を開けて一番上にあった『姫ヶ谷コトハの考察』ノートが目についた。オレはそのノートを開くと性格の所に記した『性格…あまり良くない』の横にこう書き足した。

『性格…あまり良くない、が、やさしい一面を持つ』

続けて

『泳ぎが苦手』

一息ついた所で気が抜けたのか、急に眠気が襲ってきた。今日はなんだかすごく疲れた気がする。オレはそのままの姿でベッドに倒れこんだ。

——寒気がする。目を覚ました時とっさにそう思った。夏だというのにこの寒気はなんだろうか。オレの部屋にエアコンは無いはずだが、微かに部屋のカーテンが揺れているのに気が付いた。

『開けっ放しだったか』

現時刻は夜九時を回っている。帰ってきてから約二時間、明かりを点けたまま眠っていたようだ。寝ぼけた頭でその少し開いていた窓を閉めるが、気が付けば酷く汗を掻いていた。やがて頭痛に襲われる。寒気と汗、それにこの頭痛。どうやらオレは、風邪を引いてしまったのかもしれない。『ああ、やっちゃまった』。フラフラの意識の中で、体温計を取りに一階まで下りると、テレビの音が聞こえてきた。どうやら親父がかえってきたらしい。

「親父」

「おお！ シゲル、ただいま。晩飯買って来たぞ」

そう言ってオレの親父、学尾ノボルはコンビニの弁当を指差した。いつもの事だ。我が家『学尾家』にはオレと親父、男だけの二人暮らし。母親はオレが物心つく前に亡くなったらしい。だから顔も覚えていない。小学生の頃、一度だけ写真を見せてもらった事があったが、それももう昔の話だ。親父は警察官をしながら、一人息子のオレをこの十数年間、一人で育ててきてくれた。本人には言えないが、優しくも厳格な父を、オレは尊敬していた。

「おかえり親父……今日はなんかもう、いいや」

「お前大丈夫か？ 具合悪そうだけど」

オレは引き出しの中にある体温計を取り出し、熱を測る――。

「……38.7℃、さいあく」

「まずいな、薬飲んで寝てろ」

熱があると知ったら余計苦しくなった気がする。オレはコップに水を注ぎ、薬を飲んだ。苦味さえ感じないほどに味覚まで麻痺しているようだった。親父はオレの手を肩に回すと、部屋まで連れて行

く。

「何か欲しいものはあるか？」

「……………」

親父はオレを寝かせると、電気を消しゆっくりとそのドアを閉めた。

―第12話― お見舞い

翌朝、オレは香ばしい匂いで目を覚ます。珍しく親父が手料理を振い、オレの部屋まで運びにきていた。とはいうものの、目玉焼きにベーコン、トーストという有り合わせの簡単な物だが、オレは昔からその組み合わせが大好きだった。昨晚何も食べなかった事もあるって腹も減っている。

「体調はどうだシゲル。少しは食っとけよ」

「ああ……」

朝食を済ませ、菓を飲む。昨日ほど頭痛は酷くないものの、オレは今日一日、学校を休む事にした。

親父は仕事へと向かい、オレはそのまま自分の部屋で横になっていた。昨日とは打って変わって外は晴れている。窓を閉めていても蝉の声が聞こえていた。この部屋で、唯一暑さを凌げる物といえば扇風機くらいで、オレはその風で我が身を冷ましていた。

『みんな今頃どうしているだろうか』

昨日の事もあってか、姫ヶ谷の事が頭に浮かんだ。

普段、早起きして学校に行くのも億劫だと思っていたが、行かないなら行かないで、なんかもどかしい。そんな一日もあったという間で、日も沈みかけ空を赤く染めていた。さすがに寝すぎて眠れないオレは、リビングでテレビを見ていた。だいたい体調も良くなっている。ただ、喉の渇きに絶えられず、偶然にも席を立った時に玄関のチャイムが鳴った。

「はーい」

オレは玄関でサンダルを履き、鍵を開けるとドアの隙間から来客の顔を確認する。

「ちいす！ シゲル。 お前風邪だったな」

「なんだコウイチか」

「なんだとは失礼だな！ 『心友』のコウイチくんだぞ？」

「まあ、上がれよ」

オレはコウイチを招き入れると、そのドアを再び閉める。その音に気づいたコウイチが振り向いた。

「あれ？」

「ん？ どうした」

コウイチは閉ざしたドアを再び開けると、顔を外に出しては『何か』に手招きをした。

「他に誰かいるのか？」

そのドアの隙間からスツと顔を出したのは、申し訳なさそうな表情をした姫ヶ谷コトハだった。彼女はまだ視線を反らしている。

「ああ、姫ヶ谷か」

「……お見舞いに来ました」

「ああ、わざわざありがとう（なぜ敬語？）。まあ、上がれよ」

コクリと頷く姫ヶ谷。オレはコウイチと姫ヶ谷をリビングへ招き入れた。

「なんだ、思ったよりも元気そうで安心したよ」

遠慮なくソファーに腰掛け、コウイチはそう言った。姫ヶ谷はその横でスカートにシワができぬようにと、やや遅れて腰を下ろす。

「お茶でいいか？」

オレは二人に尋ねた。

「すまんね、見舞いに来たのはこっちなのに」

「いいんだよ、だいぶ体調も良くなってきたし」。オレはコウイチに言う。

ついさっき腰を下ろしたばかりの姫ヶ谷が、再び立ち上がった。

「あ、あの、ケーキ買ってきたんだけど、食べる？ お茶も私が入れるから学尾くんは休んでてよ」

彼女はそう言うキッチンに立った。オレと親父、男だけの二人暮らしのこの部屋はいつもならば散らかっている。しかし幸いにも先日、ひと月に一度の大掃除があったばかりで、部屋は案外片付いていた。キッチンも日頃からコンビに弁当ばかりの『学尾家』にとっ

ては無縁の物で、綺麗さっぱり片付いていた。

「お皿はこれでいい？」

オレは頷く。

「お茶は？」

「冷蔵庫に麦茶が入ってる」

そんな姫ヶ谷の後ろ姿を、オレとコウイチは眺めていた。

「いいもんだな」と、コウイチがつぶやいたが、本人は恐らく口にしたことさえ気づいてないようだ。

「ところで、今日は水泳の特訓は？」

「ああ、他の連中はちゃんとやってるよ。大会まであと四日だからなあ」

「そうか、オレも明日は学校行けると思うよ（姫ヶ谷をなんとかしないと）」

しかし、思っていたよりも皆マジメに練習している事に驚いていた。残り四日間で、姫ヶ谷コトハを人並み程度に泳げるようにするにはどうすればいいだろうか。そう考えているうちに、姫ヶ谷は人数分のケーキと麦茶をトレイに乗せて運んできた。その慣れた手つきを、無意識に目で追っているうちに彼女は口を開く。

「あっ、そういえば昨日の傘……」

その眼差しは明らかにオレに向けられていた。

「ったー……っつと、このケーキ美味そうだな」

コウイチの手前、オレは思わず昨日の話をはぐらかした。案の定きよんとしたコウイチの表情が見受けられる。何の脈絡もなくケーキの話を使ったにもかかわらず、姫ヶ谷コトハは嬉しそうにケーキの話を始めた。が、申し訳ないけど話の内容は覚えていない。傘はまた後日返す事にするよ。

―第13話― 水泳大会と夏の『始まり』

笹枝高校二年のトップアイドル姫ヶ谷コトハ。しかし彼女は――
「泳げなかった」

「ゴポポボ……」

『あっ…… しまった』

今日も放課後の後、姫ヶ谷の特訓に付き合わされていた。きつと傍から見たら羨ましい限りなのだろうが、沈みゆく彼女を前にオレは物事を客観的に捉える余裕といったものがなかった。オレは彼女の両手を取りを引き上げる。

「ばなばないねよ！」

「ん？」

もう一度頼む。

「……………放さないでよ！ もう！」

「ああ、ゴメンゴメン」

オレは金辻にやった時のように、姫ヶ谷の手を取りバタ足の練習からさせていた。自転車の訓練のそののように、急に補助手を放してみたのだが水泳ではそう上手くいかないらしい。

「これも駄目か、こりゃ重症だな」

「うるさいわね！ こんな事ならジャンケンで勝つんじゃないわ」

「まあまあ」

オレは機嫌を損ねる彼女を、ギリギリの所までからかっていた。とはいってもものの、クラスマッチの水泳大会まであと二日。これは金辻よりもカナヅチかもしれない。

水泳の実力が人並み程度のこのオレが、つい先日まで泳げなかった女の子を泳げるようにするなんてミラクルは漫画や小説の中のお話……でもあり得るはずもなく、オレたちC組はあっという間に大

会当日を迎えることになった。

さあて、どうしたもんか。この時のオレは既に、C組の勝利よりも姫ヶ谷が恥をかかなくて済む方法を考えていた。オレ自身は泳げない事を恥とは思っていない（というか誰でも最初は泳げないだろう）が、放課後の雨の中を一人で練習しようとしていたほどの負けず嫌いの彼女は、そうは思わないだろう。こんな時でも人の悩みは放っておけない。オレの解は『姫ヶ谷が泳がなくて済むシュチュエーション』を作る事だった。そんなクラスマッチの開会式での事。

「なあ姫ヶ谷。リレーの順番だけど……」。オレは先頭に立つ彼女に耳打ちをする。

姫ヶ谷にはこのクラスマッチ、リレーの順番の理想を伝えた。幸いクラス委員という立場上、オレ達にはその権原がある。

「いいけど……私が最終競技者？^{アンカー} 何か策があるの？」

「この際どこに入っても一緒だろう？」

オレは彼女を説得するように言った。姫ヶ谷は平常心を装っているつもりだろうが、その曇った表情から読み取れる不安感は隠しきれない。

ならば今度はオレが見せてやろうではないか。学尾シゲル、一世一代の大芝居を。

——間もなく水泳大会が始まった。各クラスA組からF組までの第一泳者が飛び込み台に足をかける。泳法は自由だ。やがて審判長の銃声^{アイズ}と同時に選手が水中へと飛び込むと、観衆の声がかたまりました。オレはオレの作戦をイメージトレーニングする。オレは7番手。

その引継ぎはアンカーの姫ヶ谷に繋がれるはずなのだが、もとよりそのつもりはない。

オレは姫ヶ谷に繋がらない。なぜならオレは『溺れたフリ』をするからだ。恐らくその時点で大会は一時中断。その流れで姫ヶ谷は泳がなくて済むだろう。

大会の中盤。4番手のコウイチあたりまでは六クラス中3位と好成績だった。しかし6番手の金辻辺りから、徐々に他のクラスとの差が開き始め、7番手のオレが引き継ぐ頃には5位まで落ちていた。内心ほっとしていた。本当にいい勝負をしていたら、頑張っているみんなにも悪い。しかし5位なら勝敗にはこだわらないだろう。次はオレだ。手足をブラブラさせ、あたかもやる気があるかのようにストレッチを始める。少し遅れて金辻が壁に手をかけると同時にオレは飛び込んだ。その二十五メートル先の飛び込み台で、アンカーの姫ヶ谷が不安そうにこちらを窺う姿がちらと見えた。オレはクロールをしながら考えている。

『溺れるフリをするなら中間の十二メートル辺りか？』

次の瞬間、オレの左足に激痛が走った。

なんだろうかこの痛みは。

そしてすぐにその理由を把握する。

——つった

『本気で足つった！ イテッ！』

オレは溺れるフリをすることなく本当に溺れていた。ストレッチを怠ったのが原因だった。パニックに陥った時、大量の水を飲んでしまった。沈み行くオレは、けして夕日のように鮮やかではないだろう。どんな状況でもオレは泳げると甘く考えていた。次の瞬間、覚えのある柔らかな手の感触がオレの手を引っ張った。その手が導くがまま、プールサイドまで引き上げられる。

ぼやけたのは視界か意識か。それさえも分からない。しかし声だけは鮮明に聞こえた。

「学尾くん！ しっかりして！——」

——後で知った。驚く事にオレを助けたのは姫ヶ谷コトハだった。泳げないはずの彼女は、溺れたオレを真っ先に泳いで助けに来たのだ。火事場の馬鹿力とでもいうのだろうか。その時の彼女は珍しく心理の限界を超え、理性ではなく本能で動いていた——。

保健室で横になり、オレは一人考える。

水泳大会で勝つことも、姫ヶ谷を泳がせないようにすることさえ出来ず、恥をかいたのはオレだった。けれど、結果はどうあれ一生忘れられない夏の『始まり』となった。

今まさに、スタートの銃^{アイズ}声^{アイズ}が鳴る。

*****クラスマッチ編・完

―第14話― 直帰

高校二年の7月。期末テストの終わり。オレたち二年C組の教室に新鮮な空気が流れ込んだ。淀んでいた空気は一新され、後方の席に座るオレにとっては皆、孵化したばかりの雛鳥のように、まるで伸ばした羽が見えるようにさえ思えた。きっとオレの背中にも、これでもかというほど伸ばしたくなる羽があるのだろう。この瞬間がたまらない。席にもたれ、精一杯の背伸びをする。

「くうーっ……うがっ！」

背伸びをするオレの横腹に手刀突きが繰り出され、背伸びは不発に終わった。どこのバカだ。オレの背伸びを妨げたヤツは。

「シゲル！ テストどうだったよ？」

案の定、コウイチだった。

「もう……お前じゃまするなよ！ 背伸びが不発に終わったじゃねーか」

「あーすまん。で、夏休みどうする？」

テストの結果を聞いてたんじゃなかったのかよ。

「特別何も無いけど」

「じゃ、じゃあさ、姫ヶ谷でも誘って海でも行こうぜ？」

バカを言うな。ついこの前、水泳大会で恥を掻いたばかりなんだろう？ それにあの時、泳いでオレを助けに来てくれた姫ヶ谷は自分が泳いだことさえ覚えてないんだ。それはまあ、もう一度見たい気持ちも分からんでもないがな。

「そうと決まったら、どっかで晩飯でも食いながら作戦会議だな」

「あ……そうだった」

「は？」

「そういえば今日、親父と外食行く約束してたんだった」

「親父さんってあの警察官の？」

そう、それは今朝方、オレが学校へ行く私宅をしていた時のこと

――。

「おいシゲル。期末テストって今日までだったよな。調子はどうだ？」

親父はクローゼットの内扉についている鏡を見ながらネクタイを絞め尋ねた。

「まあ、ボチボチ」

「そうか……」

その時、なんとなく親父の様子がおかしい事に気が付いた。何か言いたげなのは分かるが、なんだか話を切り出しづらいようだ。それに何かは分からないが、妙な違和感が残る。

「あんな、シゲル」

「なに？」

「あ、いや……」

オレはそんな親父を横目に、グラスに麦茶を注ぐと一気に飲み干した。朝食に取ったベーコンエッグのお皿を水で洗い流す。

「すまんシゲル。毎朝同じような朝食ばかりで」

「いいよ。オレ結構、親父の作った質素な料理好きだし」

「そうか。……そうだよな、質素、質素なんだ」

どうしたのだろうか。今日の親父はいつもと違う気がする。親父はいつも何か言いづらいことがあると、鏡越しに話すクセがある。オレとは直接目を合わせようとはしない。

「よしシゲル、今日は久しぶりに外食でもするか。放課後はまっすぐ帰って来いよ」

「ん？ ああ、わかったよ。親父と外食行くのも久しぶりだな。でもなんでまた急に？」

「毎晩コンビニの弁当じゃお前も飽きるだろ？ 期末テスト終了祝いだ」――。

とまあこんな具合だ。だから今日はまっすぐ帰らなければならぬ。期末テスト終了を祝ってくれるのはありがたいが、できれば結果を聞かないでほしい所だ。

「てなワケで、今日はまっすぐ帰るよ」

「それならしゃーないな。じゃあまた、いずれ遊びに行くから」

「ああ、わかったよ」

オレは席を立ち鞆を掲げると教室を見渡した。その時、姫ヶ谷の姿はすでに教室には無く、今日は珍しく早めに帰ったようだ。

しかしその帰り道のこと――。

―第15話― 四人分

電信柱の影に隠れ何かをまじまじと観察している姫ヶ谷の後姿を見つけた。オレは彼女の目線の高さに合わせ、後ろから近づく。軽く脅かすつもりで彼女の耳元で囁いた。

「なに見てるの？」

「わっ！ ……学尾くん、ちょっと隠れて」

オレは姫ヶ谷に袖を引っ張られ電信柱の影に隠れる彼女の後ろに隠れた。で、何を見ていたのだろうか。彼女の視線の先には美容室があった。

「……何してるかって？」。何も聞かないオレに彼女は尋ねてきた。そりゃそうだ。姫ヶ谷は今の自分の行動に正当な理由をつけたいらしい。傍から見るとなんとも怪しい状況だ。

「ストーキング？」

「聞こえが悪い言い方しないでよ！ ……コホン。あのね、最近ウチのお母さんの様子が変でね」

「お母さん？ じゃあ今美容室にいるのは姫ヶ谷のお母さん？」

「――御名答」

「へえ！ 初めて見る。どれどれ」

「ちょ、ちょっと」

姫ヶ谷は再びオレの袖を引っ張った。しばらくして美容室の扉が開くと、一人の美しい女性が現れる。それが誰かを姫ヶ谷に確認する事なく彼女の母親だとわかった。

「そっくりだな。姫ヶ谷は完全に母親似だな。親父さんは見たことないけど」

「なのかな。私もパパの顔は思い出せない」

「思い出せない？」

オレは彼女のその言葉の意味を察した。母親のことを「お母さん」と呼び、父親のことを「パパ」と呼ぶ姫ヶ谷コトハのその深層心理。

それは彼女と彼女の父親との時間がそのまま止まっていることを意味する。恐らく彼女自身、無意識のうちに使い分けていることに気が付いていないようだ。

「学尾くん、なにしてるの？ 追いかけるわよ」

「え？ ああ悪い。今日はもう帰らないと」

「そう……よね」

オレは姫ヶ谷を残しその場を後にした――。

オレは親父に言われた通り、駅前のレストランに集合した。

「ここで……いいんだよな」

久しぶりの外食なのはわかるが、この高級感はいったい……。つていうかホントにここで大丈夫なのか？ オレが店内に入るとウエイトレスがやって来る。

「いらっしやいませ。ご予約はされていますか？」

「はい、学尾で予約してると思っんですけど……」

「学尾様ですね。こちらにご案内します」

どうやらここで間違いないらしい。と思っただが席に案内されて間違いとも思った。オレが案内されたテーブルにはどういう訳か四人分の席が用意されていた。

「あの……予約は二名だったと思っんですけど……」

「二名ですか？ こちらの席のご予約をいただいたのは学尾ノボル様ですが」

間違いなく親父の名前だ。しかし四人とはどういうことだろうか。疑問を抱きながらもオレは席に着いた。落ち着かない。辺りを見渡しても制服を着た学生なんてオレ以外にはいない。場違いではないだろうか。そうしているうちに親父が到着する。

「すまん。遅くなった」。そう言って隣の席へと座った。オレはさっそく問いただした。

「……なんで四人分なんだ？」

予約人数のミスかとも考えたが、親父が隣に座ったことでその可能性も無くなった。オレの目の前には空席が二つ。明らかにあと二人、誰かが来る事を説明している。警察の仕事仲間だろうか。だとしたらオレを誘うのはどうかとも思うが。

「実はなシゲル……前々から言おうとは思ってたんだが」

どうした親父。そんなにあらたまって。視線を向けるその先、親父の後方からもう一人別の女性の声が聞こえてきた。

「ゴメンなさいね。ノボルさん、遅くなっちゃって」
ノボルさん？

「ああ！クレハさん。いえいえ全然、平気ですよ」
クレハさん？ 親父の後ろには年の頃30〜40歳ほどの、美しい女性が立っていた。しかしなんだろうか、どこかで見たことあるような。さらにその後ろからもう一人、もっと若い女性の声が聞こえてきた。

「お母さん、何なの急に……」

親父は二人を前に紹介を始めた。

「この人は姫ヶ谷クレハさん。俺の再婚相手だ」

……

……

——……え——っ！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0021w/>

姫ヶ谷コトハの心理学方程式

2011年11月18日03時21分発行